

# 第106回全国高校野球選手権青森大会

## 光星洗平 本調子遠く

## 4回に被弾、無念降板

焦点

エースの意地と覚悟を持って臨んだマウンドだった。八学光星は先発に今大会初めて洗平比呂を起用。ただ、1年時から甲子園の舞台で輝きを見せてきた左腕は調子から程遠く、四回途中で降板。「チームを勝たせるため、何とか自分の今できる最大限の力を出したかったけど」と唇をかんだ。

### 左肘に痛み「力が入らず」

ありとあらゆる方法を駆使して回復を急いだ。前日に仲井宗基監督から先発を打診され、即答した。肘の状態は万全でなかったが、相手は昨秋2度敗れた青森山田。自分が行くしかない。春季大会は体調不良が重なって回避し、公式戦のマウンドはセンバツ以来。「やっぱり楽しかった。三者凡返に抑える上々の立ち上がりは自然と笑みがこぼれた。しかし、左肘は次第に言うことを聞かなくなってきた。「力が入らなくなった。四回に被弾すると自ら降板を申し出した。後を任せた投手陣の窮地に、伝令としてマウンドへ笑顔

で駆け寄った。七回1死満塁のあと1点でコールドが成立する場面。ダブルエースとして苗栗を共にしてきた岡本琉葉がボールと追い詰められた。「今はお腹が痛くてるんだから、しっかりと腕振って投げろ」。肩をほんとたたかれた岡本は三振と中飛で耐えしのいた。宿敵に敗れて仲間が泣き崩れる中、気丈に振る舞い続けた洗平。3年間で振り返ってこの問いに「自分が引っ張っていく」という思いでやってきたが、センバツも最後の夏もちゃんと投げられず負けてしまった。答え終わった瞬間、せきを切ったように悔し涙があふれ出した。(桑田友人)



7回満塁のピンチで、八学光星は洗平比呂（背番号11）が伝令としてマウンドに駆け寄る



9回八学光星2死1、三塁、竹田智紀が左前適時打を放ち、1-6とする

# 意地の1点

## 最終回に一矢 チームでつなぐ

○：チームでつないだ意地の1点が八学光星の最後の夏を飾った。昨年、秋季県大会と東北大会で敗北を喫した青森山田のエース・関浩一郎の直球に翻弄され、仲井宗基監督は「関君の最高球速を想定し、マシンで140km後半の球を打てるよう対策はしてきたつもりだったが、及ばなかった」と悔やんだ。

一回から六回まで三者凡退が続き、関に計10三振を奪われるなど、打線が振るわなかった。3打数無安打に終わった砂子田陽土主将は、自らの打撃の不振りに肩を落とした。

しかし、九回2死1、三塁、もう後がないところで、竹田智紀が左前適時打を放ち、岡本大地が生還を果たして一矢報いた。砂子田主将は「自分たちのやってきたことを信じてもらえたから、つなげられたと思う」と涙ながらに語った。